

# スペイン語の移動表現に関する一考察

— 英語、日本語との比較を通して —

田 林 洋 一

## 1. 序

本稿は、スペイン語の移動表現に関して、英語や日本語と比較しながら若干の考察をすることを目的とする。

## 2. 理論的背景

移動表現とは、(特に主語として具現化される)ある対象が、ある到着点に移動することを表す言語表現であり、全ての現象を移動と状態という二項対立的に捉える見方から俯瞰すると、状態表現と対極をなす事象表現と行うことができる。

さて、移動と状態を全ての事象の二項対立とみなす代表的な研究に池上(1975:329)がある。池上は、〈変化〉と〈状態〉という用語を用いて、この対立を扱っているが、〈変化〉に「具体的な運動」と「抽象的な運動」を認めている(池上(1975:331))。〈変化〉には、①〈変化するもの〉、②変化の〈起点〉及び〈到達点〉、③〈変化そのもの〉があり、これは移動表現にそのままシフトして考えることができる。実際、池上が挙げている例は移動表現のものが多い。

- (1) a. John moved to the pole.  
 b. ?John moved from the pole.  
 c. John moved from pole No. 1 to pole No. 2.

池上 (1975 : 330)

池上は(1)の例を挙げて、②の〈起点〉と〈到達点〉は論理的には対等であるが、言語表現に反映された限りでは心理的には決して対等ではないとしている。即ち、〈到達点〉のみを表示して〈起点〉を表示しないことは普通であるが(1a)、その逆は〈到達点〉が暗に諒解されている場合にのみ普通であるとしている(1b)<sup>1</sup>。一方、〈到達点〉の表現が明示されていれば、〈起点〉の表現も落ち着く(1c)。

なお、〈変化〉という用語は先に述べたように「具体的な運動」と「抽象的な運動」を包含するが、「抽象的な運動」は物理空間表現である「具体的な運動」をメタファー的に拡張したものと捉えることができるので、畢竟、「抽象的な運動」は「具体的な運動」に還元しうる。「具体的な運動」である空間的運動関係は、移動表現のプロトタイプとして機能する。人間は知覚した空間物理関係や事物に関する理解を非物理的領域へと絶えず拡張しているからである(Lakoff & Johnson (1980) 他を参照)。即ち、「空間構造が概念構造へ写像(mapping)される」のである(Mandler (1992 : 591))。

初めに物理的な関係を認知し、それから言語使用において抽象的な関係に應用する現象は、発達心理学の視点からもしばしば立証されてきたことで、疑いの余地はないと思われる(例えばEimas & Quinn (1994), Mandler (1996) 他を参照)。更に、空間表現は必然的に(人間の身体構造という意味において)主観的反應を生じさせ、それが抽象的概念を作り出す。そして、究極的には、空間関係におけるプロトタイプはそのままソース・ドメイン(source domain)としてターゲット・ドメイン(target domain)へと写像

<sup>1</sup> 米山(2009 : 36-37)も、以下の例を挙げて、〈起点〉のみが表示される文は非文とみなされると指摘している。

- (i) a. \*John went from Chicago.
- b. \*John went aimlessly around.

米山(2009 : 37)

されるが、空間関係から抽象関係へと写像された抽象的意味要素は、Lakoff (1990) が主張する不変化仮説 (invariance hypothesis)<sup>2</sup> に反して、本質的に空間関係の意味要素を受け継がないことがある (Tyler & Evans (2003 : 169))。

認知言語学では、一般に概念は、抽象的であれ物理的であれ、すべて空間物理的経験に根ざしたものと想定されている (例えば Lakoff (1987) 他)。しかし、Grady (1997) は、概念を外的経験に基づいた概念と内的経験に基づいた概念に二分し、時間のようないわゆる抽象的空間概念は内的概念から得られるものだとし、外的経験に基づいた概念は今まで強く扱われすぎてきたと主張する。Grady は、ある表層的なレベルの抽象的概念は外的経験からもたされるかもしれないが、全ての抽象概念が外的経験からもたらされるものではなく、より抽象的な概念は内的経験からもたらされるものだとしている。しかし、Grady は内的経験と外的経験の具体的な線引きをしておらず、どの抽象概念までが外的経験からもたらされるものかどうかの説明もしていない。

従って、本稿では、Grady の考えに一応の妥当性を認めるものの、実際的には Lakoff (1987) らが主張するように、全ての概念は外的経験からもたらされるものだという理論的前提に立つことにする。

### 3. 各言語における移動表現の意味要素

さて、移動表現はスペイン語や英語に限らず、全ての言語に普遍的に存在すると思われるが、その表現方法にはかなりの違いがある。

まず、最も基本的な移動表現は移動動詞を用いたものであろう。

---

<sup>2</sup> ターゲット・ドメインはソース・ドメインのイメージスキーマを保持するという仮説。

- (2) a. Juan fue a la escuela.  
 b. John went to school.  
 c. ジョンは学校へ行った。

(2)の各動詞(スペイン語 fue, 英語 went, 日本語「行った」)は移動(move)の意味を持つが、逆に言えば主語がどのように学校へ行ったのかという様態(manner)に関する情報はない。以下の文は移動以外の情報(様態)が含まれている移動動詞である。

- (3) a. Juan corrió a la estación.  
 b. John ran to the station.  
 c. \*ジョンは学校へ走った。  
 d. ジョンは学校へ走って行った。

中村(2003:32)

(3a)のスペイン語の動詞 corrió には Juan が「走って」駅まで「行った」という二つの情報が組み込まれている(前者は様態で後者は移動の意味である)。Juan はのんびりと歩いて駅まで移動した訳ではなく、「走って」移動したという様態の情報が含まれている(なお、中村は「スペイン語やカタラン語には(3a)に相当する表現はない」と述べているが、これは的を射ていない)。(3b)の英語の動詞 ran も、スペイン語の corrió と同様に様態と移動の両方の意味を持つが、(3c)の日本語では「走った」というだけでは非文となり、(3d)の「走って行った」のように複合動詞にして表現するしか方法はない<sup>3</sup>。「走って」が様態を表し、「行った」が移動の意味を持っていることから、

<sup>3</sup> 以下の文のように後置詞「まで」を用いると適格になる。

(i) ジョンは駅まで走った。

日本語の「まで」や英語の till, スペイン語の hasta を用いると「有界性(bounded)」が発生するため、適格になることが多い。

日本語では動詞に様態と移動の意味を同時に組み込むことはできないと言える。更に以下の例を参照。

- (4) a. Juan anda a la estación.  
 b. John walks to the station.  
 c. ? ジョンは駅へ歩く。  
 d. ジョンは駅へ歩いていく。
- (5) a. Juan toma el taxi a la estación.  
 b. John takes a taxi to the station.  
 c. \*ジョンは駅へタクシーを拾う。  
 d. ジョンは駅へタクシーを拾っていく。

スペイン語 (4a) と英語 (4b) の例では、(3)と同様に、様態 (歩く) と移動 (いく) の両方の意味要素が含まれているのに対し、日本語の動詞では (4c) が示すように両方の意味を組み込むことが不可能で、(4d) のように複合動詞「歩いていく」にして様態「歩いて」と移動「いく」の意味要素を別々に表すしかない。(5)の各文も同様に、スペイン語 (5a) と英語 (5b) の例では、タクシーを捕まえて行くことを一つの動詞句 (toma el taxi 及び takes a taxi) で表せるのに対し、日本語では (5d) のように「(タクシーを) 拾っていく」のように複合動詞で移動と様態の両方を別個に表している ((5c) は様態と移動を一つの動詞で表そうとしたために非文になった例である)。

このように、一つの動詞の中に複数の意味要素が含まれていることを、Talmy (1985) は語彙化 (lexicalization) または包含 (conflation) と呼んでいる (宮島 (1984), 松本 (2003: 275) 他を参照)<sup>4</sup>。Talmy は移動の表現

<sup>4</sup> 米山 (2009: 30) は、要素が動詞に組み込まれる現象には包入・合成 (conflation), 編入 (incorporation), 語彙化 (lexicalization) などの呼び名があるが、これらはほぼ同じことを指していると述べている。

に基づいて、世界の諸言語においてどのような意味要素が語彙化されているのかを考察し、その類型化を試みている。ここまでの考察では、日本語は移動動詞に様態の意味を包含することを許さないのに対して、英語やスペイン語は移動動詞に様態の意味を包含できるようにみえる。

ところが、日本語も英語やスペイン語と同様に包含が可能な表現がある。以下では、それぞれ、(6)は volar, fly, 飛ぶ, という動詞, (7)は subir, climb, 上がる, という動詞が、移動と様態の両方の意味を包含している。

- (6) a. Juan vuela a Nueva York.  
 b. John flies to New York.  
 c. ジョンはニューヨークへ飛ぶ。
- (7) a. Juan sube a la montaña en funicular.  
 b. John climbs to the mountain by cable car.  
 c. ジョンはケーブルカーで山を上がる。

更に、スペイン語では(3)と(4)の移動表現を、以下のように現在分詞を用いて迂言用法（複合動詞ないしは現在分詞）として表すことも可能である<sup>5</sup>。

- (8) a. Juan fue corriendo a la estación.  
 b. Juan va andando a la estación.

むしろスペイン語は移動動詞に様態を組み込むことができず、現在分詞を用いて迂言的な用法で表す方が適格になる場合が多い。

<sup>5</sup> (5)の tomar el taxi を迂言用法で表現すると、別の意味になる。

(i) a. Juan va tomando el taxi a la estación.  
 b. フアンは駅へタクシーを拾っていくところだ。  
 (ia) は (ib) の意味であり、タクシーを拾おうとして行動を起こすか、またはタクシーで移動しているという事象がクローズアップされる。

- (9) a. Juan va nadando a la costa.  
 b. John swims to the coast.  
 c. フアンは岸へ泳いでいく。
- (10) \*Juan nada a la costa<sup>6</sup>.
- (11) a. Juan va a la estación haciendo footing.  
 b. John jogs to the station.  
 c. フアンは駅にジョギングで行く。
- (12) \*Juan hace footing a la estación.
- (13) a. Juan va hacia la habitación, bailando.  
 a'. Juan entra bailando en la habitación.  
 b. John dances into the room.  
 c. フアンは踊りながら部屋まで入っていく。
- (14) \*Juan baila a la habitación.
- (15) a. Los estudiantes van haciendo demostración a la embajada.  
 b. The students demonstrate to the Embassy.  
 c. 学生たちは大使館までデモをしていく。

---

<sup>6</sup> 動詞 *nadar* は移動の到着点が明示 (a la costa) されると非文となるが、場所を表す前置詞 *en* を伴うと容認される。また、主に競技などの場面では、他動詞的に用いることが可能となる。なお、(ib) の *nadar* を他動詞的に解釈する例は少なく、小学館の『西和中辞典 (第2版)』で (ii) の例文がある程度である (第1版は *nadar* の他動詞的用法を認めてはいるが、例文は記載されていない)。

(i) a. Juan nada en el río. (フアンは川で泳いだ)  
 b. Juan nada el río en dos horas y media.  
 (フアンは2時間半で川を泳いだ)

(ii) Nadar el río para pasar la frontera.  
 (国境を越えるために川を泳いで渡る)

スペイン語の動詞は、自動詞的にも他動詞的にも使われることが多い。以下の文を参照。

(iii) a. Juan trabaja en la fábrica. (フアンは工場で働く)  
 b. Juan trabaja la tierra. (フアンは畑を耕す)

(iiia) ではフアンがどのように働いているか (工学者としてか技術者としてか、など) という状態についての情報は無いが、(iiib) ではフアンは農民であり、畑を耕すという仕事に従事していることが分かる。

(16) \*Los estudiantes hacen demostración a la embajada.

それぞれ、(9)と(10)は動詞 *nadar*, (11)と(12)は動詞句 *hacer footing*, (13)と(14)は動詞 *bailar*, (15)と(16)は動詞句 *hacer demostración* が、迂言用法では適格になるのに対して、様態と移動の両方の意味を一つの動詞に包含しようとする  
と非文になることを示している。

従って、ここまでの議論では、英語は動詞に様態と移動の意味を包含することができ、スペイン語は二つの意味を動詞に包含することができないことが多く、日本語は更に動詞への包含が不可能になる傾向があると言える。

#### 4. 移動表現に包含される経路の意味

しかし、移動動詞に包含されるのは様態の意味だけではない。経路(path)も様態と同じく、移動動詞に包含されることがある。

- (17) a. La botella entró flotando a la cueva.  
b. The bottle floated into the cave.  
c. 瓶が洞窟に浮かびながら入っていった。

Talmy (2000 : 365)

(18) \*La botella flotó a la cueva.

(17b) では、様態「浮かびながら」と、移動「いった」の意味が主動詞 *float* に包含されており、移動の経路の意味は前置詞 *into* に包含されている。一方、(17a) のスペイン語では現在分詞 *flotando* を用いて様態を表現している。ここで注目すべきは動詞 *entró* で、「入っていった」という、経路の情報は移動動詞 *entrar* に組み込まれていることである<sup>7</sup>。なお、*a la cueva* は経路では

<sup>7</sup> Klipple (1997) や米山 (2009 : 28) は以下の例を挙げて、動詞に経路の意味が包



なく、対象物の移動の背景、すなわち地 (ground) である。

(17c) の日本語では「浮かびながら」(様態)、「入って」(経路)、「いった」(移動) というように、様態、経路、移動の全ての意味がいわばバラバラに分割され、各語彙はそれぞれ一つの意味を担いつつ、複合動詞や副詞として具現化されて表現されている。(18) はスペイン語では移動動詞に様態 (浮かびながら) を包含した文であるが、非文となる。同様に、以下の例文を参照。

- (19) a. Saqué el barril de la bodega rodándolo.  
 b. I rolled the keg out of the storeroom.  
 c. 私が樽を倉庫から転がして出した。

Talmy (2000 : 366)

- (20) \*Rodé el barril de la bodega.

(19) も同様に、(19a) のスペイン語では現在分詞 *rodándolo* によって移動の様態を、主動詞 *sacar* によって移動の経路と移動の意味をそれぞれ表しているのに対し、(19b) の英語では移動の意味と様態は主動詞 *rolled* で、移動の経路は不変化詞 (*particle*) である *out* (または前置詞句 *out of*) で表現されている。日本語である (19c) は複合動詞、より詳しく述べるならば複合動詞の中でも主部となる後に位置する要素「出した」で移動と経路の意味を、複

---

含されるのは、スペイン語だけでなく同じロマンス語であるフランス語にも言えるとしている。

- (i) a. Put the noodles in!  
 b. Mets les pâtes!

Klippel (1997)

- c. 麺を入れろ!

(ia) は前置詞 *in* が必要で、これによって「入れる」という経路の意味を表しているが、(ib) のフランス語では、動詞 *mettre* が経路の意味も同時に包含しているため、英語の前置詞に対応する要素は不要である。なお、(ic) の日本語も、フランス語と同様の振る舞いを見せ、動詞「入れる」に移動と経路の二つの意味が包含されている。

合動詞の前項（または副詞節）である「転がして」で様態を表している。スペイン語では、様態を主動詞に組み込もうとすると、(20)が示すように非文となる。

以上の移動表現は、使役表現への認知的なシフトが可能である。即ち、移動表現がソース・ドメインとして機能し、ターゲット・ドメインである使役表現へ「写像」されるのである。

- (21) a. Quité el papel del paquete cortándolo.  
 b. I cut the wrapper off the package.  
 c. 私は荷物から包み紙を切り取った。

松本 (2003 : 277 一部改)

(21)は包み紙を取り去ることで荷物が状態変化を起こしている例であるが、「切る」行為は(21a)のスペイン語では分詞 *cortándolo* で表現されるのに対し、(21b)の英語では主動詞 *cut* として表現されている。そして、紙が「取られた」経路は、スペイン語では主動詞 *quitar* で表現されるのに対し、英語では前置詞 *off* で表されている。

従って、スペイン語では移動動詞の経路が主動詞に包含されるのに対し、英語では前置詞に、そして日本語では複合動詞に包含されているといえることができる。

移動表現では移動の意味の他に、その様態と経路が具現化される要素が言語毎に動詞や分詞、前置詞などのように異なることを見たが、それ以外にも具現化される要素がある。北カリフォルニアのホッカン語族のアツゲウィ語では、移動する対象(図 (*figure*))と呼ばれる)が動詞に包含されることが報告されている(Talmy (1985) 他を参照)。アツゲウィ語では、移動する対象がどのようなものなのかによって、動詞の語幹が以下のように変わる。

- (22) a. *-lup-* : 小さく, 丸く, 光る物体が動く (位置している)

- b. -caq- : ぬるぬるした固まり状の物体が動く (位置している)
- c. -qput- : 粉々の乾いた土が動く (位置している)

即ち、移動動詞に包含される可能性のある意味は、①移動、②様態、③経路、④移動の対象 (図) の4つがあることになる。そして、この4つの意味が具現化される要素は、言語毎に異なるということである。

Talmy (1985) は、世界の諸言語における移動表現を比較して、上記のどの要素が移動の動詞に包含されるかを考察し、主に3つのパターンを見出している。1つは、様態や原因が動詞に包含される言語で、英語、ドイツ語などがある。以下の例文を考察してみよう。

- (23) a. La botella salió (de la cueva) flotando.  
 b. The bottle floated out of the cave.  
 c. 瓶が浮かびながら洞窟から出てきた。

(23b)では、「浮かびながら」という様態が主動詞の中に組み込まれており、移動の経路は不変化詞の out (ないしは前置詞句 out of) によって具現化されている<sup>8</sup>。このタイプの言語には、移動の様態を表す移動動詞が多数存在する場合が多い。例えば、英語では、dash(突進する)、hurry(急ぐ)、rumble(ぶらぶら歩く)、shuffle(足を引きずって歩く)、stride(大股で歩く)、swagger(威張って歩く)、waddle(よたよた歩く)などである<sup>9</sup>。

2つ目のパターンは、経路が動詞に包含されている言語で、スペイン語やフランス語が代表的である。(23a)では、主動詞 salir が「閉じられた空間か

<sup>8</sup> Dirven (1993) は、英語では動詞と小辞構造の組み合わせによって移動表現の経路が表現できると示唆している。即ち、英語は動詞と小辞構造の組み合わせからある特定の意味(ないしは新しい意味)を生み出す言語であるのに対して、スペイン語ではそうではない。

<sup>9</sup> Levin (1993) によれば、様態を表す移動動詞は英語には100以上存在するとのことである。

ら外へ」という意味を担っている。ここで、前置詞句 *de la cueva* は「地」として経路を表示しているが、必須の要素ではなく、経路のスキーマを表しているのは動詞ということになる。様態は、分詞や副詞の形で表現されることが多い((23b)では *flotando*, (23c)では「浮かびながら」)。スペイン語には経路を包含する動詞がいくつもある。例えば, *subir*(上がる), *bajar*(下がる), *salir*(出る), *entrar*(入る), *traspasar*(越える)などである<sup>10</sup>。

3つ目のパターンは、先に述べたアツゲウィ語のように、移動の対象が動詞に包含される言語である。これは、数は少ないと思われるが、存在自体を無視するわけにはいかない(ここまでの詳しい議論は松本(2003:275-277)を参照)。

## 5. Talmy による「イベント統合の類型論」

Talmy (1991) は、以上の包含パターンを類型論的に発展させて、イベント統合の類型論 (typology of event integration) を提案している。例えば、(23)の例では、イベントが2つ存在し、1つは瓶が洞窟から出てくるという移動、もう1つは瓶が浮かんでいるという状態である。(23)の各例文は、この2つのイベントが統合されて、1つの「複合イベント」として具現化したものを表現している。このうち、主要なイベントは移動であり、複合イベントの中でも中核的な存在を担う「枠づけイベント (framing event)」と呼ばれる。一方、浮かんでいるという様態の情報は、移動表現ではむしろ副次的な扱い

<sup>10</sup> このうち、動詞 *entrar* は英語の *enter* に相当するため、英語にも経路が包含されている移動動詞がないわけではないが、英語の *enter* はもともとロマンス語からの借用である。Talmy (2000:366) は、英語にはそのままスペイン語の経路動詞のグロスとして使える経路動詞が多くあるが、その大部分はロマンス語からの借用であるとして、以下のような動詞を列挙している。例えば, *exit* (出る), *ascend* (上がる), *descend* (下がる), *pass* (通過する), *cross* (渡る), *traverse* (横断する), *circle* (回る), *return* (戻る), *arrive* (着く), *advance* (前進する), *join* (合わせる), *separate* (離れる), など。

を受けるものであり、枠づけイベントに対して補助的な役割を担うことから「共イベント (coevent)」と呼ばれる<sup>11</sup>。共イベントは言語によっては様態だけでなく、原因、目的、結果などの要素が絡むこともある。これらの要素が絡むのは、やはり物理的関係から抽象的関係への写像が原因である。

更に、枠づけイベントの中で、移動物 (図) と移動場所 (地) との関係 (すなわち経路) を表す要素が中核スキーマ (core schema) であるとされる<sup>12</sup>。

スペイン語や日本語は、移動の経路は動詞で表すことが多いため、中核スキーマは動詞が担っているといえることができる。このような言語を、動詞枠づけ言語 (verb-framed language) と呼ぶ。一方、英語やドイツ語のように、経路が前置詞や不変化詞で表される言語、即ち動詞が中核スキーマを担うわけではなく、動詞を修飾する付随的要素 (衛星: satellite) が担う言語を付随要素枠づけ言語 (satellite-framed language) と呼ぶ<sup>13</sup>。この衛星に相当する

<sup>11</sup> 二つのイベントは、複文で表されることも、単文で表されることもある。

(i) a. La vela se apagó porque alguien la sopló.  
誰かが蠟燭を吹いたために蠟燭が消えた。

b. Con el aire se apagó la vela.  
風で蠟燭が消えた。

c. El aire apagó la vela.  
風が蠟燭を消した。

(ia) は 2 つのイベントを複文 (2 つの定形動詞を持つ文) で表したものであり、「誰かが息を吹きかけたこと」と「蠟燭が消えたこと」の 2 つのイベントがある。しかし、(ib) で示すように「風によって」という副詞的な要素を持つ付加詞の存在があれば、単文で表すことが可能となる。更に、(ic) では「風が吹いて、それが蠟燭を吹き消した」という 2 つのイベントが単文で表されている例であり、概念的には 2 つの事象 (イベント) が統合したものだといえることができる。Talmy (2000: 352) はこれを「複合イベントの概念構造体としてのマクロ・イベント」と呼んでいる。

<sup>12</sup> Talmy (1991) の議論は、移動表現の中核をなすものが移動のスキーマである、というトートロジーに陥る危険がある。だが、移動表現の中に包含されている状態などの情報は副次的なものとする見方は的を射ているものと思われる。

<sup>13</sup> Talmy (2000: 359) は、動詞枠づけ言語にはロマンス諸語、セム語、日本語、タミール語、ポリネシア語、バンツ語、マヤ諸語、ネズパース語、カド語などが含まれると説明している。一方、衛星枠づけ言語には、ロマンス諸語を除くインド・ヨーロッパ語、フィン・ウゴル諸語、中国語、オジブワ語、ワルピリ語があるとされている。

要素は、英語では不変化詞、ドイツ語では動詞の前綴り、中国語では複合動詞の後項動詞などがある<sup>14</sup>。

さて、この移動表現におけるイベント統合は、移動以外の表現にもみられる。ここにも、移動表現という具体的関係から、その他の抽象的關係への拡張が見られる。例えば、以下の例文を参照。

- (24) a. Cerré la puerta de una patada.  
 b. I kicked the door shut.  
 c. 私はドアを蹴って閉めた。

(24)に登場するイベントは、①ドアを蹴った、②それによってドアが閉まった、という2つである。このうち、中核スキーマをなすのは②のドアが閉まる事象である。この二つのイベントは移動と様態の関係ではなく、原因と結果の関係（詳しく言えば変化の原因と変化の結果）である。そして、枠づけイベント（中核的）をなすのは結果（ドアが閉まること）であり、共イベント（付随的）をなすのは原因（ドアを蹴ったこと）である。(24b)の英語の場合、形容詞の shut が付随的要素として働き、動詞 kick が変化の結果というイベントを包含している。これに対し、スペイン語では中核的要素の枠づけイベントは動詞 cerrar で表され、付随的要素の共イベントは付加詞 de

<sup>14</sup> Slobin (1996) は、英語に代表される付随要素枠づけ言語では様態を詳しく説明する傾向があるのに対し、スペイン語に代表される動詞枠づけ言語では様態を省略するか、簡略化するという報告をしている。日本語では、様態はしばしばオノマトペ（擬音語）で表現されるが、オノマトペが省略されても中核的イベントを表すのに不都合は特にない。即ち、話者は発話の際に何を言語化するのかを無意識のうちに選択している可能性がある (Levelt (1989) 他参照)。このようなプロセスは、発話のための思考 (thinking for speaking) と呼ばれる。発話のための思考が、いわゆる「サピア・ウォーフの仮説 (Sapir-Whorf hypothesis)」(言語によって思考が影響されるとする仮説。言語相対説 (linguistic relativism) とも呼ぶ。これを強く推し進めた理論が、人間の思考や認識のあり方を言語が決定することを強調した「言語決定論 (linguistic determinism)」である。辻 (2002: 70) 他を参照) の証拠となるかどうかについては、意見が分かれるところである。

una patada で表されている。つまり、枠づけイベントと共イベントは、移動と様態という関係を表すだけでなく、そこから認知的に派生されうる拡張関係にも見られるということである。更に以下の例文を参照。

- (25) a. El hueso se salió de su sitio de un tirón.  
 b. The bone pulled out of its socket.  
 c. 骨が関節から抜けた。

Talmy (2000 : 365)

スペイン語の (25a) では、付加詞 (または前置詞句) de un tirón によって、骨 (図) が関節 (地) から引き抜かれたという理由 (原因) を表している。そして、経路は動詞 salir によって表現されている。一方、英語の (25b) では、引き抜かれた原因は動詞 pulled に包含され、その経路は不変化詞 out (ないしは前置詞句 out of) に包含されている。そして両者とも、移動の意味は動詞が担う。

Talmy は日本語とスペイン語の比較を試みていないが、スペイン語と日本語は移動表現に関しては類型論的に同じ言語であると述べており (Talmy (2000 : 359) 参照)、その点で (25) の例文は Talmy の主張の反例となりうる。しかし、英語とスペイン語との比較では、原因という付随的要素の共イベントは英語は動詞 pulled が担うのに対して、スペイン語では付加詞 de un tirón が担っている。また、「抜かれた」という状態変化の結果 (枠づけイベント) は、スペイン語では動詞 salir が、英語では不変化詞 out (または前置詞句 out of) がそれぞれ担っているという点で、Talmy の主張を裏付ける結果となっている。(25) の事実から、スペイン語と英語の比較に関しては、移動の様態という物理的關係から、状態変化という抽象的關係へと拡張されることを示している。

今までの議論を整理すると、表 1 のようになる。

【表1：各言語の移動表現において、それぞれの意味を担う要素】

	移動	経路	様態・結果など
西語・仏語など	動詞	動詞	分詞・付加詞
英語・独語など	動詞	不変化詞など	動詞
日本語など	動詞	(複合) 動詞	副詞節など

Talmy の類型論において、「動詞」とは果たしてどの要素を具体的に指しているのか、解釈の混乱が見られると松本(2003:277)は主張している。まず、「動詞」とはいわゆる語彙範疇 (category) を指しているとする解釈がある。Wienold (1995) はこの解釈を認め、Talmy の理論は、各言語の移動動詞の中に様態や経路の意味が入っているかによって類型されると主張する。英語の動詞には移動の様態を表す語が豊富にあるのに対し、移動の経路をも表す動詞についてはロマンス語からの借用語に限られている。ドイツ語はロマンス語からの借用がほとんどなく、従って経路は衛星で表示され、経路を表す動詞はほとんどない。一方、スペイン語やフランス語では、移動の様態は付加詞や分詞で表現され、移動の経路を表す動詞が豊富に存在する。日本語は、経路は複合動詞で表されることが多く、様態は副詞句(または副詞節)やオノマトペを含む副詞的要素で表すことが多い。

更なる問題として、動詞の定義は何か、という問題がある。通常、「動詞」の定義としては、意味論的には動作、状態、存在などを表す語とされる。形態的には、スペイン語の場合、主語の人称や数に応じて屈折変化をするが、定形 (finite form) と不定形 (non finite form) があり、後者は迂言用法も含むと定義されることが多い (例えば大塚他 (1982:1291-1292) や寺澤 (2002:700) を参照)。もしこの意味的・形態的定義に従うならば、1つの単文には動詞が複数存在することも可能になる。例えば、スペイン語の場合、現在分詞なども動詞の不定形として分類されることになるので、現在分詞の副詞的用法も動詞の1つとみなされることになる。すると、Talmy が主張する類型論的分類はその基盤を失うことになる。



もう1つ、「動詞」とは文(特に単文)の主要部(head)を成す語という解釈が存在する。恐らく、Talmyが考えている「動詞」とは、この主要部を指していると思われる。そのため、スペイン語の分析において、動詞の一種である分詞を「動詞」の仲間に入れていない<sup>15</sup>。更に言えば、Talmyが中核スキーマとして枠づけイベント、補助関係として共イベントを設定しているのは、2つのイベントが統合されて1つになった時に、どちらがより主要な要素か、が重視されていなければならない。即ち、意味論的な場面においての主要な要素と、統語的な場面においての主要部にずれが見られるというのが、Talmyの主張である<sup>16</sup>。

## 6. 移動表現に付与されるその他のイベント

さて、Talmy(2000:347-349)は、移動の表現以外にも、図と地から成るイベントは存在しうると説明している。具体的には、①移動、の他に、②状態変化、③時間的輪郭付け、④行為の関連付け、⑤実現、の5つである。順に見てみよう。

### (26) 移動のイベント

- a. El balón entró rodando.
- b. The ball rolled in.
- c. ボールが転がって入っていった。

### (27) 時間的輪郭付けのイベントにおけるアスペクト

- a. Siguieron hablando.
- b. They talked on.

<sup>15</sup> 分詞や迂言用法で用いられる動詞的要素は「準動詞(verbal)」と呼ばれることがある。

<sup>16</sup> この分析の問題点を、松本(2003:278)が中国語の例を挙げて指摘している。

- c. 彼らは話し続けた。
- (28) 状態変化のイベントにおける変化した属性
- a. Se sopló la vela.
- b. The candle blew out.
- c. 蠟燭が吹き消された。
- (29) 行為の関連付けのイベントにおける相関関係
- a. Ella cantó junto con los otros.
- b. She sang along.
- c. 彼女は一緒に歌った。
- (30) 実現のイベントにおける達成または確証
- a. La policía siguió al fugitivo y lo arrestó.
- b. The police hunted the fugitive down.
- c. 警察は逃亡者を追跡して捉えた。

(26)では移動の経路「入った」がスペイン語では動詞 *entrar*, 英語では前置詞 *in*, 日本語では複合動詞の後項で表現されている。(27)ではアスペクト「続けた」が, スペイン語では動詞 *seguir*, 英語では前置詞 *on*, 日本語では複合動詞の後項で表現されている。(28)も同様に, 変化した属性「消された」が, スペイン語では動詞 *soplar*, 英語では前置詞 *out*, 日本語では複合動詞の後項で表現されている。(26)~(28)は今までの議論の想定内であり, それぞれ, スペイン語は枠づけ動詞(動詞)で, 英語は衛星(前置詞)で, 日本語では複合動詞で, (26)~(28)の中核的イベントが表現されている。

例外的な存在が(29)と(30)である。(29)では, 相関関係「一緒に」がスペイン語(*junto con*), 英語(*along*), 日本語(一緒に)全てにおいて付加詞(または前置詞)で表現されている。即ち, 相関関係に関しては, スペイン語, 英語, 日本語は全て衛星枠づけ言語のような振る舞いを見せるということになる。

(30)では, 達成「警察が逃走の目的であった逃亡犯を捕まえるという意図の実現」を表す際に, スペイン語では接続詞 *y* を伴って, 二つの動詞 *seguir* と

arrestar で表現するしかない。日本語でも同様に、「～して」という接続詞的な性質を持つ要素で表すしか方法はない。スペイン語における分詞や、日本語における複合動詞で(30)を表そうとすると（即ち、複合イベントで表そうとすると）、以下に示すように非文となる。

- (3) a. \*La policía arrestó al fugitivo siguiéndolo.  
 b. \*警察は逃亡者を追い捉えた。

従って、スペイン語と日本語では「実現」に関してはイベント統合ができない<sup>17</sup>。一方、英語では衛星である前置詞 down によって「捉えた」という実現を表しているため、衛星枠づけ言語の特徴に反していない。従って、Talmy の類型論には一定の妥当性はあるが、例外の現象も数多くあり、あくまで傾向として理解されなければならない<sup>18</sup>。なお、上記のイベントが、全て移動表現である「図と地」の関係に還元されるかどうかについては更なる実証的研

<sup>17</sup> 「実現」の1つである以下のような文も、スペイン語と日本語ではイベント統合ができない。

- (i) a. Él pateó la puerta y abrió un agujero en la pared.  
 b. He kicked a hole in the wall.

佐久間 (2007: 206)

- c. 彼は壁を蹴って穴を開けた。

(ib) の英語に対応するスペイン語は (ia) であり、イベント統合ができずに重文で表すしかない。日本語では、「彼はドアに穴を蹴り開けた」という複合動詞で表すよりも、重文で表した (ic) の方が容認度が高いと思われる。

<sup>18</sup> 例外の現象は他にもあり、例えばフランス語やスペイン語のような動詞枠づけ言語が、1つの動詞が様態と移動の両方の意味を担うことがある(米山(2009: 80)を参照)。

- (i) a. La fille a dansé vers le garçon.  
 (少女は少年の方へ踊って行った)

Stringer (2001)

- b. Allez, courons dans la maison!  
 (さあ、走って家の中へ入ろう)

Stringer (2006)

- (ii) a. La botella flotó hacia la cueva.  
 (瓶は洞窟の方へ浮かんで行った)

究が必要であるが、相互に写像関係、または拡張関係にあり、そのソース・ドメインとなっているのは移動表現とみて間違いはないと思われる。

## 7. 移動表現の種類ごとの分析

これまでは動詞が基本的に移動（ないしは状態の変化など、抽象概念にまで拡張された移動表現）の意味を持つイベントを考察してきた。そして、それらの表現が様態（や結果など）の意味を持つかどうかを検討してきた<sup>19</sup>。しかし、非移動動詞（行為動詞）が移動表現を表すこともあった。従って、原理的には以下の4通りの可能性がある。

- (32) a. 移動動詞で様態を伴わない表現 (ir, venir など)
- b. 移動動詞で様態を伴う表現 (correr, andar など)
- c. 非移動動詞で移動を伴う表現 (bailar など)
- d. 非移動動詞で移動を伴わない表現 (スペイン語にはない)

(32a) は移動を表す表現としては最も無標的 (no marcado) なもので、どの言語にも存在すると思われる。以下を参照。

- (33) a. Juan fue a la estación.
- b. John went to the station.

- 
- b. La botella flotó por el canal.  
(瓶は運河に沿って浮かんで行った)

Aske (1989)

上記のように、有界性を表す前置詞「まで」などを伴うことで、英語のような衛星枠づけ言語のように振る舞うことがある。

<sup>19</sup> なお、移動表現に様態を伴う動詞を移動様態動詞と呼ぶこともある。Zubizarreta & Oh (2007) は移動様態動詞を統語的に分析し、英語やオランダ語などのゲルマン諸語、及び朝鮮語を連続動詞言語 (serial-verb language) と呼び、フランス語やスペイン語などのロマンス諸語と比較検討している。

c. ジョンは駅へ行った。

(33)は全て着点や経路が明記されており、適格であるが、以下のような文ではスペイン語と英語では解釈が異なる。

(34) a. La rata fue bajo la mesa.

b. The mouse went under the table.

スペイン語の (34a) は、机の下でネズミが歩き回っているという解釈を持つが、英語の (34b) は、ネズミが机の下に行くという行為を表しており、(34a) とは解釈が異なる。更に以下の文を参照。

(35) a. La rata fue detrás del piano.

b. The mouse went behind the piano.

スペイン語の (35a) はピアノの裏側でネズミが歩き回っているという解釈を持つが、英語の (35b) は、ネズミがピアノの裏側に行くという行為を表している。即ち、スペイン語の (34a) と (35a) は、移動動詞 *ir* を伴っていながら、前置詞 *a* に代表される方向を示す経路表現が明示されていないので、経路の解釈を持たない。一方、英語の (34b) と (35b) は、移動動詞 *go* を伴ってはいるが、前置詞 *to* などに代表される方向を表す経路表現が明示的に示されていないのに、経路を移動する解釈しか存在しない。

同様に、(32b) の様態を示す移動動詞でも、スペイン語では場所の解釈しか許されないのに対して、英語では経路の解釈しか許されない。

(36) a. La rata corrió debajo de la mesa.

b. The mouse ran under the table

(37) a. La rata corrió detrás del piano.

b. The mouse ran behind the piano.

米山 (2009: 43 スペイン語文追加)

- (38) a. ネズミは机の下で走り回っていた。  
 b. ネズミは机の下を走り抜けた。  
 (39) a. ネズミはピアノの下で走り回っていた。  
 b. ネズミはピアノの下を走り抜けた。

スペイン語の (36a) は (38a) の解釈, すなわち経路の意味は持たず, 場所の解釈しか許さないのに対して, 英語の (36b) は (38b) の解釈, 即ち経路の解釈しか許さない。(37)も同様であり, スペイン語の (37a) は (39a) の場所の解釈しか許さないのに対して, 英語の (37b) は (39b) の解釈, 即ち経路の意味しか容認されない<sup>20</sup>。ここで興味深いことは, 先に述べたように, 様態の意味を持つ移動動詞は, 日本語では複合動詞「走り回っていた」や「走り抜けた」で表現されるということである。

英語に関しては, (32b) の様態を示す移動動詞は, その様態の種類に応じて場所の解釈が許されることもある。例えば, 英語の移動動詞 *crawl* は, 動詞 *run* と比べると移動速度が落ちるからであろうか, 場所の解釈が許される。一方, スペイン語やフランス語では, 場所読みの解釈しか存在せず, 経路の解釈や着点の解釈は容認されない。

- (40) a. La rata gateó sobre la mesa.  
 b. The mouse crawled on the table.  
 c. La souris a rampé sur la table.

Levin & Rapoport (1988)

<sup>20</sup> なお, 英語の文では経路の解釈の他に, 着点の解釈, 即ち「ネズミは机の下へ走り込んだ」と「ネズミはピアノの下へ走り込んだ」という3つ目の解釈が可能である。

- (41) a. ネズミは机の上を這いまわった。  
 b. ネズミは机の上へ這っていった。  
 c. ネズミは机の上を這って通り抜けた。
- (42) a. El bebé fue a gatas.  
 b. El bebé anduvo a gatas.
- (43) a. 赤ん坊は四つん這いで行った（這って行った）。  
 b. 赤ん坊は四つん這いで歩いた（這って歩いた）。

スペイン語の (40a) 及びフランス語の (40c) は場所の解釈しか許されず、日本語では (41a) で表されるのに対して、英語の (40b) は(41)の3つの解釈、即ち、場所の解釈、着点の解釈、経路の解釈のいずれも許すという点で曖昧である。これは、英語の動詞 run などが場所の解釈を許さず、着点の解釈及び経路の解釈という2つの解釈しか容認されないことから考えると、解釈が1つ増えているということになる。

なお、スペイン語では、様態は付加詞で表すことが多いと前節で述べたが、(42a) のように副詞句 a gatas (四つん這いで) で表現することができる。この付加詞は様態を表す動詞と組合すこともでき、(42b) のように、動詞 andar においても副詞句 a gatas は用いられる (なお、スペイン語には gatear という様態の意味を含む動詞も存在する)。日本語では、(43) が示すように、「四つん這いで」という副詞を伴うか、「這って行った (または這って歩いた)」のように複合動詞で表すしか方法はない。これは前述したように、日本語で様態を表す移動動詞は複合動詞か動詞+付加詞で具現化されることの証左になる。

(32c) の、行為動詞で移動を表す表現についても(13)と(14)で前述した。スペイン語では基本的に現在分詞で表すことが多く、一方、英語では前置詞 to や into などを経路の表現を付与すると移動表現を構築することができた。これらの行為動詞は、場所を表す前置詞句が後続すると、解釈に差が出る。

- (44) a. María bailó debajo de la lámpara.  
 b. Mary danced under the lamp.

米山 (2009 : 50)

- (45) a. メアリーはランプの下で踊った。  
 b. メアリーはランプの下へ踊って行った。

スペイン語の (44a) は、場所の解釈である (45a) の読みしか許さない。一方、英語の (44b) は、(45a) の場所の解釈が優先されるが、(45b) の経路の解釈も可能である。(44b) が経路の解釈である (45b) も許容するのは、(44b) からの意味拡張 (meaning extension) によるものと考えられる<sup>21</sup>。

(32d) の移動表現はスペイン語、日本語には存在しないが、英語には例えば way 構文 (way-construction) と呼ばれる表現がある。以下の文を参照<sup>22</sup>。

- (46) a. Bill salió del restaurante eructando.  
 b. Harry bajó el camino quejándose.  
 c. Sam entró en la reunión haciendo bromas.

<sup>21</sup> Jackendoff (1990 : 224) は、GO 付加詞規則 (GO-adjunct rule) という用語を用いて意味拡張を説明しているが、移動の意味が拡張されてネットワークを構築しているという現象自体には変化はないと思われる。また、意味のネットワーク構築は移動表現だけ (即ち、GO 付加詞だけ) に留まるものではないと推察されるため、ここでは意味拡張という用語を用いることにする。

<sup>22</sup> 中村 (2003 : 25-27) や国廣 (1970) は way 構文を make one's way を基本とする意味拡張の視点からとらえている。

- (i) a. He pushed his way through the crowd.  
 b. He made his way through the crowd by pushing.

(ia) の way 構文は、(ib) の made his way を基本とし、それに手段や方法、随伴などを表す動詞の意味が包含されることにより意味拡張が起こった結果である。しかし、様態要素 (manner element) は、本来移動を表す動詞には拡張の結果としてとらえられない。

- (ii) He threaded/wove/wriggled his way through the valleys.

(ii) は「縫うように／のたうつように進む」の意味であり、移動の意味は構文から拡張されていない。なお、国廣は意味の包含を意味の重層性 (stratification of meaning) と呼んでいる。



- (47) a. Bill belched his way out of the restaurant.  
 b. Harry moaned his way down the road.  
 c. Sam joked his way into the meeting.

Jackendoff (1990 : 211)

- (48) a. ビルはゲップをしながらレストランから出てきた。  
 b. ハリーは不平を言いながら道を下っていった。  
 c. サムは冗談を言いながら会議に加わった。

(47)で示した英語の way 構文は、(46)の各スペイン語文ではそれに対応する表現がないため、それぞれ動詞 eructar, quejarse, hacer la broma を現在分詞に変えて表現するしか方法はない<sup>23</sup>。また、それに対応する日本語の文(48)も、「～しながら」を用いて表現するしかない<sup>24</sup>。

英語には (32d) に対応する (変化なども含めた広義の) 移動表現が多い。その1つに音放出動詞 (verbs of sound emission) と呼ばれるものがある (米山 (2009 : 56) 他を参照)<sup>25</sup>。

<sup>23</sup> 英語ではスペイン語のように様態の意味を現在分詞を用いて表すこともある。

- (i) a. A car screamed to a stop at the kerb.  
 b. A car came to a stop at the kerb screaming.

中村 (2003 : 28)

(ia) は動詞 screamed に移動の意味が込められているが、(ib) のように現在分詞 screaming を用いて様態を表すことができる。

<sup>24</sup> 英語の way 構文は、移動表現でありながら、逆説的に動詞が移動の意味を持つと成立しない。

- (i) a. \*He walked his way to the store.  
 b. \*Bill went/walked/ran his way down the hallway.

米山 (2009 : 54-55)

更に、英語の way 構文で移動の意味を表す際、どんな動詞でも容認されるわけではなく、動詞が表す動作が移動という行為に対して語用論的に推論されるものでなければならない。即ち、意味拡張は動詞が持つ語用論的含意 (pragmatic implicature) の関係に根ざしている。従って、移動に対して語用論的に推論されない動詞 (know, rumble, wipe など) は意味拡張が不可能である。

<sup>25</sup> 音放出動詞は音を出す対象が移動を伴うと語用論的に推論される時に使用可能となる。従って、以下のような文は容認されない。

- (49) a. El Mercedes bonito y nuevo pasó por la autopista haciendo ruido de motor.  
 b. La bala la rozó (pasó rozándola) con ruido.
- (50) a. The beautiful new Mercedes purred along the autobahn.  
 b. The bullet whistled by her.

Levin & Rappaport Hovav (1991)

- (51) a. 新型の美しいベンツが高速道路をエンジン音を響かせながら通っていった。  
 b. 弾丸が彼女の脇を音をさせながら掠めていった。

(50a)は構成素分析では移動の意味を抽出することができないが、「エンジン音を響かせる」というイベント(共イベント)と、「車が走る」というイベント(枠づけイベント)が融合し、前者が後者を語用論的に含意するため、移動の意味が生じている。(50b)も同様に、「弾丸が音を立てる」という共イベントが、「掠めて通る」という枠づけイベントを語用論的に含意するため、移動の意味が生じる。(49a)のスペイン語では、動詞 *hacer* を現在分詞に変えて表現するしかない。また、(49b)は前置詞句 *con ruido* を用いて、「音を立てて」という副詞的な要素を付け加えるしかない。両者に共通するのは、主動詞には移動を意味する動詞 (*pasar* 及び *rozar* 又は *pasar rozando*) が必須要素ということである。(51)の日本語の各文では、「～しながら」を用いて表現するしかない。この時、スペイン語と同じように、主動詞には移動の意味を内在的に持つ動詞が複合動詞として具現化している。

英語では、更にもう1つのイベント(使役)を組み合わせて、計3つのイベントを1つの動詞に組み込むこともできる。

(i) The cat purred down the street.

(i)では、猫が喉をゴロゴロと鳴らしながら動くということは普通ありえない。従って、移動の意味を伴わず、結果、音放出動詞として機能しない(Levin & Rappaport Hovav (1995: 191) 参照)。

- (52) a. They rumbled the tramcar down the street.  
 b. 彼らはトロッコを押して音を立てて下らせていった。

(52a) には3つのイベントが組み込まれている。1つは「彼らがトロッコを押した」という使役のイベント、2つ目は「トロッコが移動した」という構文による移動の意味、3つ目は「トロッコがゴロゴロと音を立てていた」という状態の意味である。スペイン語にはこの3つのイベントを1つの動詞に包含することはできず、それぞれのイベントの意味を担う要素を別個に用いて、重文や付加詞などを使って表すしかない（日本語も (52b) が示すようにスペイン語と同じ振る舞いをする）。

- (53) Ellos empujaron la vagoneta y ésta pasó por la calle haciendo ruido.

スペイン語には、語用論的に含意した結果、動詞が移動の意味を持つようになったものも存在する。以下の文を参照。

- (54) Se embolsó con la moto cuesta abajo.  
 (55) 彼はバイクで猛スピードを上げて坂道を下って行った。

(54)の動詞 *embalsarse* は「モーターなどを過度に回転させる」という意味と「猛スピードを出す」という2つの意味がある。前者の「モーターを過度に回転させる」という意味から、その結果「猛スピードが出る」ことにつながるものが語用論的に含意させるために多義的になったと思われる。しかし、(55)の日本語では、やはり副詞的に「猛スピードを上げて」と動詞を修飾しなければ、移動の表現を表すことはできない。

更に、英語には使役移動構文 (caused-motion construction) の存在がある。スペイン語や日本語にはこの表現はない。

(56) Pat estornudó y sopló la espuma del café capuchino.

(57) Pat sneezed the foam off the cappuccino.

大堀 (2002 : 137)

(58) パットはくしゃみしてカプチーノから泡を飛ばした。

英語の(57)ではイベントが2つあり、「くしゃみをしたこと」と、その結果「カプチーノから泡を飛ばした」ことが語用論的推論によって結びついている。そして、この2つのイベントが融合し、使役移動構文として1つの動詞で表すことが可能となっている。一方、スペイン語には使役移動構文はなく、接続詞 *y* を用いて重文で表すしか方法はない。日本語の(58)も同様に、2つの動詞を用いて表現する必要がある。やはり両者に共通する点は、移動の意味を持つ動詞が伴わなければ、「泡はカプチーノから飛ぶ」というイベントを表せないことである。

総括すると、(32a)の表現はスペイン語、英語、日本語に存在するが、(32b)や(32c)の場合は経路を明示するとスペイン語や日本語では様態を現在分詞などで表す必要がある。(32d)の場合も同様である。以上をまとめると、表2のようになる。

【表2：移動を表す動詞の種類と各言語の具現化する要素】

	西語など	英語など	日本語など
移動動詞, -様態 (32a)	動詞	動詞	動詞
移動動詞, +様態 (32b)	分詞など	動詞	副詞など
行為動詞, +移動 (32c)	分詞など	動詞	複合動詞など
行為動詞, -移動 (32d)	重文など	構文	重文など

## 8. 結 語

以上、スペイン語の移動表現に関して、主に英語と日本語との比較を試み

た。スペイン語では、動詞に付与される情報は移動と経路の意味であるのに対し、英語では移動と様態の意味が付与されることが多いことを見た。また、英語は行為動詞でも「構文」という形で移動の意味が付与されることできるが、スペイン語では分詞や重文などで表現するしかないことを見た。

## 参考文献

- Aske, J. (1989) "Path Predicates in English and Spanish: A Closer Look". *BLS* 15. 1-14.
- Dirven, R. (1993) "Dividing up Physical and Mental Space into Conceptual Categories by Means of English Prepositions". In C. Zelinsky-Wibbelt. (ed.) *The Semantics of Preposition: From Mental Processing to Natural Language*. 73-97. Mouton de Gruyter.
- Eimas, P. & Quinn, P. (1994) "Studies on the Formation of Perceptually Based Basic-Level Categories in Young Infants". *Child Development*, 65. 903-917.
- Grady, J. (1997) *Foundation of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*. UC Berkeley.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』 大修館書店。
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Klippel, E. (1997) "Prepositions and Variation". A.-M. di Sciullo. (ed.) *Projections and Interface Conditions: Essays on Modularity*. 74-108. Oxford University Press.
- 国廣哲彌 (1970) 『意味の諸相』 三省堂。
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things. What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1990) "The Invariance Hypothesis: is abstract reason based on image-schemas?" *Cognitive Linguistics*, 1-1. 39-74.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.

- Levelt, W, J, M. (1989) *Speaking: From Intention to Articulation*. MIT Press.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. The University of Chicago Press.
- Levin, B. & M, Rappaport Hovav (1991) “Wiping the Slate Clean: A Lexical Semantic Exploration”. *Cognition* 41. 123-151.
- Levin, B. & M, Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- Levin, B. & Rapoport, T. R. (1988) “Lexical Subordination”. *CLS* 24. 275-289.
- Mandler, J. (1992) “How to Build a Baby: 2. Conceptual Primitives”. *Psychological Review*, 99. 587-604.
- Mandler, J. (1996) “Preverbal Representation and Language”. In P. Bloom, M. Peterson, L. Nadal and M. Garrett. (eds.) *Language and Space*. 365-384. MIT Press.
- 松本曜編 (2003) 『認知意味論』 大修館書店。
- 宮島達夫 (1984) 「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」国語学会編『金田一春彦博士古希記念論文集 2』 456-486. 三省堂書店。
- 中村捷 (2003) 『意味論—動的意味論』 開拓社。
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京大学出版会。
- 大塚高信他監修 (1982) 『新英語学辞典』 研究社。
- 佐久間淳一 (2007) 『はじめてみよう言語学』 研究社。
- Slobin, D, I. (1996) “Two Ways to Travel: Verbs of Motion in English and Spanish”. In Masayoshi Shibatani and Sandra, A, T. (eds.) *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*. 195-219. Oxford University Press.
- Stringer, D. (2001) “The Syntax of Paths and Boundaries”. *CLS* 37. 139-153.
- Stringer, D. (2006) “Typological Tendencies and Universal Grammar in the Acquisition of Adpositions”. P, Saint-Dizier. (ed.) *Syntax and Semantics of Prepositions*. 57-68. Springer.
- Talmy, L. (1985) “Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms”. In Timothy Shopen. (ed.) *Grammatical Categories and the Lexicon*

- (*Language Typology and Syntactic Description 3*), 57-149. Cambridge University Press.
- Talmy, L. (1991) "Path to Realization". In *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting, Berkeley Linguistic Society*. 480-519. Berkeley Linguistics Society University of California.
- Talmy, L. (2000) "A Typology of Event Conflation". 坂原茂編『認知言語学の発展』347-451. ひつじ書房.
- 寺澤芳雄編 (2002) 『英語学要語辞典』 研究社.
- 辻幸夫編 (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社.
- Tyler, A. & V, Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge University Press.
- Wienold, G. (1995) "Lexical and Conceptual Structures in Expression for Movement and Space: with Reference to Japanese, Korean, Thai, and Indonesian as Compared to English and German". In U. Egli, P. Pause, C. Schwarze, A. Von Stechow and G. Wiernold. (eds.) *Lexical Knowledge in the Organization of Language*. 301-340. John Benjamins.
- 米山三明 (2009) 『意味論から見る英語の構造 — 移動と状態変化の表現をめぐる』 開拓社.
- Zubizarreta, M. L. & E, Oh (2007) *On the Syntactic Composition of Manner and Motion*. MIT Press.